

2018 年 12 月 16 日（日）「祈りを妨げる山」

マタイ 21:18-22（その 2）

18 翌朝、イエスは都に帰る途中、空腹を覚えられた。19 道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何もないのに気づかれた。それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。20 弟子たちは、これを見て、驚いて言った。「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか。」21 イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、たとい、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言っても、そのとおりになります。22 あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」

【序論】

アドベント第三主日となりました。マタイ福音書から語るのは、今年はこれが最後になります。先週と同じ箇所（主イエスがいちじくの木を枯らす奇跡の場面）を扱いますが、今日は後半部分に焦点を置きます。特に 21 節以下では「祈りの力」が話題の中心になっているのが分かるでしょう。いちじくの木がどうして瞬時に枯れたのかを弟子たちが問うたところ、主イエスは祈りについて教え始めたのです。やや文脈を逸脱しているように感じなくもありませんが¹、これは主イエスの呪いの宣言が一つの「祈り」であったことを言い表しているでしょう。主はどんな時にも祈られました。そして、その祈りには力がありました。言葉に偽りがなかったのです。実現しない祈りはなかった。

私たちは今日、自分の祈りを根本から見直さなくてはなりません。力ある祈り、神に聞かれる祈りとはどのようなものか。私たちの祈りには確信があるだろうか。なぜ祈りに力がないのか。いや、そもそも祈っているだろうか。忙しくて祈る時間がないなどと言っているだろうか。様々な問いが自分の中に湧いてきます。今日、私たちは聖霊によって取り扱われなくてはならないでしょう。

【本論】

¹ 主イエスは、いちじくの木が枯れたことが何を意味しているかを説明することはなさらない。今回は、いちじくの木が枯らされることは、以下の事柄を象徴しているとお話しした。

①腐敗したイスラエルの神殿宗教の終わり

②主イエスご自身が一度十字架で死なれること

本論 1. 山が動くとは①

イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、**たとい、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言っても、そのとおりになります。**」(21:21)

主イエスは、いちじくの木が枯れたのはご自分の「信仰による祈り」の結果だと言われます。この一見奇妙な奇跡は確かに神の御心に適う業であった。それは、主がイスラエルの腐敗した神殿宗教を終わらせ、多くの人の回復のためにいのちを捨てることは、まさしく神の御心だったからです。

主イエスは弟子たちにも、信仰があれば同様の驚くべき奇跡を行なえると言われます。「山を動かす」とは字義通りに捉える必要のない誇張表現だと思われませんが²、それでは主が意図している「山」とは何を意味するのでしょうか。確かにこの時、一行の目の前には「オリーブ山」が聳え立っていたと思われれます。その山を弟子たちが動かしたという記録はありませんから、主はやはり比喩的な意味でこのことを言っておられると考えるのがよいでしょう。

「山」をどう捉えるかについて、幾つの解釈があります。

第一に、「イスラエルの不信仰」と捉える人がいます。主イエスを信じることでできない人々の頑なな心を取り去られる日が来る。主イエスを拒んでいた人々の心が造り変えられ、悔い改めて、信じ、受け入れられるようになる。不信仰という巨大な「山」が動かされる。それは確かに主の死によって実現していくものです。

第二に、「イスラエルの儀式主義、律法主義、形式主義、便宜主義」を指すと言う人もいます。これは宗教が頑なになること。生き方全般に命がなくなり、真に神を喜ぶことができなくなる。そして、そのような自分の状態にさえ気づかなくなってしまう。聖書の言葉の表面だけを行ない、真の祈りがささげられなくなる。このような形骸化した宗教という「山」も、祈りによって動かされると。

第三に、「山のような困難」を指すと言う人もいます。真実が明らかになることかも知れない。修復不可能と思われた人間関係が取り戻されることかも知れない。あるいは、確かにキリスト教会の歴史を見ていくと、信仰者の祈りによって驚くべき状況の変化がもたらされたという証が数多くあります。ジョージ・ミュラーは、その一生の間に、孤児を養うために 100 万ポンド以上のお金が与えられたばかりでなく、祈りに応えられて 3 万人もの人が救われました。孤児ばかりでなく、一人の人の救いのために 50 年もの年月、毎日祈り続けたといひます。このような信仰者の証を聞くと、山が動かされる

² 大きな障害を取り除くことを表すユダヤの習慣的比喩。

ことを知るので。

「山を動かす」という主の約束はいずれに解釈されてもよいでしょう。重要なことは、私たちがこの御言葉を自分自身のものとする事なのです。

本論 2. 祈らない罪

あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。(21:22)

この約束はどう捉えるべきでしょうか。子どもなら、自分が欲しいものを祈ったら必ずもらえるんだと理解するかも知れません。いえ、子どもだけではありません。人間は全般的にそのようなご利益宗教的な考え方をしやすいのです。確かにここでは無制限に開かれた可能性が提示されています。しかし、「信じて祈り求めるものなら」という条件が付いていることを見落としてはなりません。これは、私たちの自己中心的な要求を一切除外します。祈りが神の御心に適合しているならば、可能性は無制限に開かれるのです。では、神の御心はどのように知ることができるか。それは、聖霊によって照らされなくては分かりません。偽りなき心で、信じて、確信をもって祈るとき、神は応えてくださるでしょう。

しかしながら、ここで一つの大きな問題が私たちの前に立ちのびてきます。私たちは果たしてそのような祈りをささげているだろうか。神の御心を知り、それに自分が適合するところまで進んだことがどれほどあるだろうか。私たちの思いは果たしてそれほどに純粹であろうか。祈りの言葉は人に聞かせるものとなってしまっていないだろうか。私はこの箇所を学びながら、自分の祈りの質が問われました。

もう 15 年ほど前に読んだ、アンドリュー・マーレーの『祈りの生活』という本を引っ張り出し、読み直してみました。その第 1 章「祈らない罪」という部分は、恐ろしく自分の心を抉るものとして迫ってきます。

良心が十分に働き、悔いた心がその哀れな様子を本当に感じるには、自分の罪を一つ一つ名指して列挙することが必要である。告白は厳しく行い、自分を偽らない自分の声でなければならない。教職者たちの集会で、一人一人が深く恥じ入る思いで罪を感じたものは、この祈らない罪をおいて他にないと思う。

このような祈らない罪を犯させるものは、いったい何だろうか。初めのうち、それはただ弱さとしか見なされない。人々はただ時間が不足し雑事の多いことを口実にし、それがどんなに罪深い状態かに気づいていない。しかし今までのことはとにかく、今後私たちはこの祈らない罪を本当に罪として感じるようになりたいものである。

まず、考えてみたい。

1 祈らないことは、神に対するひどい侮辱である。神は、「わたしのところに来なさい」「わたしに話さない」「わたしに求めなさい」と招き、「来て、わたしと交わる祝福を経験しなさい」と私たちに呼びかける、聖い栄光ある方である。また私たちをご自身のかたちに造り、私たちの罪をそのひとり子によって贖われた方である。それゆえ、神と親しく交わるなら、この上ない光栄と救いを見出すに違いない。

それなのに、私たちはこの上ない特権をどう利用しているだろうか。たった5分間しか祈らない人が何と多いことだろう。時間がないと言い、祈ろうとする心にならないと言う。半時間を神と共に過す方法を知らない。全然祈らないのではないが、毎日祈るにしてもその祈りには喜びがない。祈りの中に喜びが持てないことは、まだ彼らにとって神がすべてになっていない証拠である。

友人たちが訪ねてきたらどうするだろうか。喜んで迎え、楽しく話し合う時間がないなどとは決して言わないことだろう。いや、ない時でもあると言い、無理をしても見つけるだろう。作り出すのである。そんな楽しいことには何を犠牲にしても時間を惜しまないが、神と共に語るために5分間でも割こうとしないのである。自分に都合のよいことにはいつも時間を見つけるが、神に対しては、今日も明日も、1時間の余暇さえなくむだに月を重ね年を過す。このように考えてくれば、「神と交わる時間がない」と言うことは、神へのひどい侮辱であることが分る。そこで私たちは深く恥じ入り、「ああ、私は間違っていました。神よ、祈らなかったという大きな罪を赦してください」と叫ばないではいられないのではないだろうか。

2 祈らないことが、今日、私たちの霊的生活が不完全である原因になっている。そこに、私たちの生活が大部分、「肉」の支配下にあることが証明されている。祈りは霊的いのちの鼓動であって、それによって魂の健康を診断することができる。信者や教職者にとって祈らない罪があるならば、それは魂のうちにある神のいのちが病んで死にひんしていることを示すものである。

延々と引用を続けることはできませんが、この後、更に次の内容が続いていきます。

3 牧師が祈らないことによって、教会は何と大きな損失を受けているだろうか。信者を祈りの生活へ訓練するのが牧師の仕事である。ところが牧師自身が神と語ることを知らず、聖霊の豊かな恵みを受ける方法を心得ていなかったら、どうしてその牧師にこの仕事ができるだろうか。

4 すべての人に福音を宣べ伝えなさいとキリストは命令されたが、祈らない罪が存在する限り、そうすることはできない。主にすべてを献げ、魂の救いを求めて最後まで祈る人。このような人を一人でも多く獲得することが伝道の目的である。³

³ アンドリュー・マーレー／金井為一郎訳『祈りの生活』いのちのことば社、1985、pp. 16-19

本論 3. まず自分が祈りの人となる

もし私たちの祈りが空を打つようなものであり（Ⅰコリント 9:26）、何の手応えもなく、応えられる確信もないのであれば、私たちは聖霊に満たされていないのであり、神の御心を知らないということになるでしょう。私たちの内に、神との関係を妨げる「山」があるのです。それは不信仰という山、形式主義という山、罪という山です。今私たちは、主との全く新しい関係に立ち、祈りの生活に入りたいと思います。「**新しい関係とは、主がすべての罪から——祈らない罪からさえも——私たちを救う方として、主を仰ぐこと、また私たちの信仰を献げて、主との親しい交わりの生活にゆだねることである**」（p. 7）。教会から祈りが途絶えたとき、救いは起きなくなるでしょう。なぜなら、御心に適う祈りとは、どんな時にも何らかの形で「救い」と結びついているからです。私自身がまず祈りの人として変えられ、練られたいと願っています。そして、この教会をそのような群れに導きたいと思います。

最後に、人が変えられるためには、何らかの障害となっている「山」が取り除けられなくてはならないとしても、私たちは他人の「山」ばかりを見て指摘するのではなく、まず自分自身の「山」を見つめなくてはなりません。祈りの内容は「あの人の高慢を打ち砕いてください」ではなく、「私自身が彼／彼女との関係において変えられなくてはならないことは何でしょうか」と祈るところにこそ、主からの回答が見出されるでしょう。私たちの祈りから一切の高ぶりが取り去られたときに、主の御心は見えてくるからです。私たちには他人を変えることはできません。そして、私たちは自分自身をも変えることができない。ならば尚のこと、まず自分が聖霊によって取り扱われ、造り変えられることを祈り求めるべきではないでしょうか。そして、私たちが造り変えられたときに、初めて人をとりなす祈りがささげられるようになるのです。

【結論】

今日は自分の「祈り」を見直す時となりました。この後、「礼拝後の祈り」の時間に入りますが、今までの自分のあり方を主の御前に告白しようではありませんか。そして、偽りのない心で主に近づき、この限られた人生、1分でも多く神と語らう時を持ちたいと思います。私もそのような教会形成を目指します。皆様の生活が祈りと平安に満ちたものとなるように、この牧会の働きをささげます。

【祈り】

私たちとの交わりを求めてくださっている主よ。祈らなかった私たちをお赦してください。聖霊に満たされていない状態の私たちを憐れんでください。私たちの心の罪を示し、それを真実に御前に告白する勇気をお与えください。私たちの内からあらゆるプライド、高ぶりを取り去り、へりくだった心で真実な祈りをささげる者へと造り変えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人に語り、応答を求め、その祈りを聞き給う、父なる神の愛。
祈れない者に祈りを教え、神との親しき交わりへ導き給う、主イエス・キリストの恵み。
一つ一つ心の罪を示し、妥協なく御前に告白させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。